

令和6年度 学校経営報告(学校評価報告書)

四條畷市立忍ヶ丘小学校
校長 上井 大介

1 学校経営方針

- 令和4年1月に策定の「四條畷市教育振興基本計画」の基本理念は「みんなの学びが叶うまち ～生涯学び 夢 挑戦～」とされており、「予測不可能な時代を豊かに生き、未来を拓く人材を育成するには、子どもからおとなまで、すべての人々が個性や創造性を発揮し、夢や可能性に挑戦しながら、協働し、学び続けることができる環境づくりが必要」と示されている。この基本理念の実現に向けて、学校においては、今を生きる子どもたちの未来を見据え、「学び方を学ばせる」、「学ぶ力や学ぶ意欲、学ぶ楽しさを体感させ、身に付けさせる」ことがミッションであると考えている。
- このことを背景に、本校学校教育目標は四條畷中学校区の合言葉を参酌のうえ、教職員間の議論を経て、
★畷中校区の合言葉 3つの「るるる」
・ねば一る（自分と向き合う力）・やってみ一る（自分を高める力）・つなが一る（他者とつながる力）
★令和6年度【学校教育目標】
「みんなで つくる 楽しい忍小 ◇挑戦しよう！ ◇つながろう！ ◇学び続けよう！」
とした。授業等のすべての学校教育活動のなか、あらゆる場面において、子どもたちが「主体的に考え行動する『生きる力』を育む教育の推進」を図る。子どもたちには、まず「夢」を持ち、その実現に向け、自分を高めるために挑戦し、仲間や周囲とつながり、主体的に学び続ける子どもの育成に努める。
- この目標を達成するための具体的な方策として、以下を挙げる。
- ①「あいさつ」がしっかりできることを掲げたい。仲間や先生、地域の方々と、学校でも地域でも家庭でも、「おはようございます」等、様々な「あいさつ」を通して、つながりを大切にしたい。そして、子ども同士はもとより、教職員間、教職員と保護者、学校と地域など様々な関係において「つながり」を意識した取組みを推進していく。
 - ②「ありがとう」という感謝の気持ちと周囲を気遣える「やさしい」気持ちを持ってほしい。良好なつながりを築くため、「ありがとう」や気遣い心遣いを通して、つながりを深め、安心感を持たせたい。
 - ③安心感の上に「チャレンジ」する気持ちを持たせたい。「失敗や間違いは恥ずかしいことではなく、成長の大きな一歩であること」を浸透させ、何事にも挑戦する意欲を持たせ自己肯定感醸成につなげたい。
- 以上、自身も他者もともに成長できる学校を創造するとともに、そのような子どもたちの育成に関わる教職員、保護者、地域の方々にも、これら方針のもと、取り組める仕掛けづくりを進めていく。

2 めざす学校像、子ども像、教師像（中期目標）

★めざす学校像	○子どもたちも おとなも よりよい自分 よりよいつながり を育む学校
★めざす子ども像	○よりよい自分・学び・つながりをめざし、チャレンジする子 ○自分や友だちを大切にし、つながる子 ○主体的に、楽しく学び続ける子
★めざす教師像	○「楽しい学校」の創り手として、役割を自覚し、主体的に実施する教師 ○ことばを大切にし、子どもたちの育ちを支える教師 ○強みを生かし、弱みを支え合う 成長し続ける教職員集団

3 学校の現状（よさと課題）

（1）子どもたちの実態

本校の子どもたちは、学習面ではまじめに取り組み、課題には真摯に向き合い、答えを見いだそうとする姿が見られる。しかし、失敗やまちがい、できないことなどに対する不安が高く、主体的に行動したり、挑戦したりすることができにくい傾向にある。挑戦してみようとする安心感と場があれば力を発揮し、やりきろうとするが、失敗やまちがうことを避けようとするために、一歩踏み出すことを躊躇する姿も見受けられる。子どもたちが挑戦してみようという気持ちにある安心感や持てる力を発揮できる場を用意し、できる自分に自信を持ち、自己肯定感を徐々にでも高めることが大切と考える。

また、人に対して思いやりを持った行動ができる子どもの姿があるものの、個の考えや意見を主張するが故に対立したり、折り合いがつけられず自己解決できなかつたりする状況も見受けられる。子どもたちも自ら相手を理解し、折り合いをつけ、共に進んでいくための力を身に付けていく必要がある。そのために、子どもが周囲の仲間への関心や意識を持ち、考えがぶつかった際も話し合いをとおして、双方の意見を交流させ、折り合いをつける経験を積ませたい。その結果、不登校児童数やいじめ事案の減少につなげたい。

（2）子どもたちを取り巻く環境

①教育環境

本校は四條畷市の東側、自然豊かな環境に立つ。1973年(昭和48年)、児童数増加に伴い、四條畷市立四條畷小学校から分かれ、開校した。校区内は、閑静な住宅地とJR忍ヶ丘駅を中心とした商業中心の地域があり、住みよい環境にある。地域の教育に対する関心は比較的高く、学校教育活動には注目が集まる。一方で、子どもたちが考え行動する前に、大人によって失敗のないレールを敷いてしまう傾向も見受けられる。子どもたちに任せ、考えさせ、様々な経験をさせる意識を高めたい。

また、子どもたちの多くが進学する四條畷中学校とは敷地が隣接し、小中連携棟を介してつながっている。両校の教職員が行き来することが増え、不必要な段差のない進学を意識した連携が実現しつつある。この環境は強みであり、今後もこの好環境を大いに活用した取組みにつなげたい。

②地域

校区は岡山自治会という一つの自治会下にある。永く岡山地区に居住されている方と、新しく住まいを構える方が混在し、歴史を守りながら新しいつながりを築こうとする取組みが、地域の各団体によって企画運営され、街づくりを行っている。学校や教育全般に概ね協力的であり、子どもに対する働きかけも積極的である。反面、地域や保護者間のつながりにおいて二極化を感じる。子どもの成長に対する期待が大きい反面、あらゆる事象に対する反応や答えを急がれたり、白黒をはっきりと求められたりする傾向が増えているように感じる。

③組織（教職員、PTA、保護者）

本校教職員は様々な取組みを通して、組織的に動くことや協働して取り組むことを経験することができた。中でも支援教育コーディネーターを中心とした校内委員会やケース会議は、組織運営の大きな柱を担った。また、子どもや保護者に対して、適切な距離感で寄り添い、熱心に取り組める。問題行動等に係る子どもへの指導も教師の感覚による一方的な指導ではなく、子どもの話をしっかりと聞き、安心感を持たせながら、解決に向かう意識が高い。

PTAは学校運営や学校行事等に関し、理解を示していただいている。常に役員会等において、情報共有しながら、進めることができる素地がある。

保護者も子育てについて、熱心に関わっていただける家庭が多い。一方で昨今の社会情勢と同様に「こうあるべき」という考えを持つ傾向が見られる。近年は保護者の多忙な実態やつながりの欠如も相まって、子育てに悩まれるなか、外部機関につながる家庭が増える傾向にある。

4 今年度の達成目標、具体的な方策

目標設定区分Ⅰ『学校経営』

A 今年度の成果目標		達成基準（各種調査、アンケート等）	
教育課程の編成やカリキュラム・マネジメントの実現等を主眼に置いた学習指導要領の確実な実施に向け、「確かな学び」の定着を図るとともに「生きる力」を育む指導を行う。 ①「豊かな心の醸成」 子どもが夢を持ち、子どもの安心・安全の確保を最優先に置いた学校運営に努める。あいさつなど他者との関わりを通して「つながり」を意識し、「自己肯定感や自己有用感の醸成」を図る。 ②「確かな学力の育成」 研究教科を国語科とし、「説明力」の育成に努める。また、タブレットP Cを活用した授業を推進し、授業改善をめざす。 ③「健やかな体の育成」 「体力づくりアクションプラン」に基づき、児童の体力向上に資する取組みを充実させるとともに、健康に関する指導や食育の推進を図り、命や健康を大切にする意識を育む。		① 学校教育自己診断、児童保護者教職員アンケート（3学期分） A（児）「自分から進んであいさつしている」（R5/68%） B（児）「自分にはよいところがあると思う」（R5/75%） C（児）「人の役に立つ人間になりたいと思う」（R5/93%） D（児）「将来の夢や目標を持っている」（R5/80%） E（児）「先生は、いじめなど自分が困っているときに真剣に対応してくれる」（R5/87%） F（児）「自分が苦手なことやできないことにもチャレンジするようにがんばっている」（新設） G（児）「新しいことを学ぶことや知ることは楽しい」（新設） H（児）「学校は楽しく安心できる」（R5/82%） ② 学校教育自己診断等 児童保護者教職員アンケート（3学期分） A（児）「授業はわかりやすく楽しい」（R5/85%） B（児）「国語の学習は好きですか」（R5/53%） C（児）「書くときや話すときに、説明力を意識するようになってきましたか」（R5/73%） D（児）「自分で計画を立てて勉強をしていますか」（R5/66%） E すくすくウォッチ「わくわく問題」の正答率 F 全国学力・学習状況調査の正答率 G 標準学力検査（N R T）の正答率 H（保）（児）（教）「タブレットP C等I C T機器を活用した授業」に関する質問（R5/児 92%、保 69%、教 94%） ③ 学校教育自己診断等 児童保護者教職員アンケート（3学期分） A（児）「運動することは好きですか」（新設） B 全国体力・運動能力、運動習慣等調査 C（児）「給食の時間は楽しみだ」（R5/82%）	
B 目標実現に向けた取組み			
項目	達成基準	結果	評価
①「豊かな心の醸成」	A 80%以上 B 80%以上 C 90%以上 D 85%以上 E 85%以上	A 74% △ B 78% △ C 95% ○ D 86% ○ E 91% ○	概ね達成に至った。 あいさつは、年度当初から全校集会等で啓発や発信してきたが、達成基準には至らなかった。しかし、代表委員会児童らが自らあいさつ週間の提案をし、取組みを行った。そ

(様式2)

	F 80%以上 G 80%以上 H 85%以上 ※肯定回答	F 84% ○ G 86% ○ H 89% ○	その後、地域見守りの方から「あいさつをするようになってきた。嬉しい」との声をいただくなど、児童の意識は広がりつつある。その他、将来の夢や目標、苦手なことへのチャレンジなどは達成基準を上回った。全体的に子どもたちは安心感をもって学校生活を送っているように感じており、教職員の寄り添った丁寧な指導の賜物と考える。
②「確かな学力の育成」	A 85%以上 B 70%以上 C 75%以上 D 70%以上 E 府平均以上 F 全国平均 G 全国平均 H 児 90%以上 保 75%以上 教 95%以上 ※肯定回答	A 84% △ B 67% △ C 77% ○ D 63% △ E +4ポイント○ F +1.02ポイント○ G -0.01ポイント△ H 児87% △ H 保72% △ H 教88% △	学力面では概ね達成に至ったが、その他項目では達成に至らなかった。 研究テーマに沿い、「説明力」や記述に関する取組みを進めてきた。全国学調やすくすくウォッチの結果については、記述問題を中心に成果が出ている。学校が一丸となったここ数年の取組みの成果と考えている。 一方で、「自分で計画を立てて勉強する」や「タブレットPC等ICT機器の活用」については、推進できてはいるもののさらなる改善の必要がある。
③「健やかな体の育成」	A 80%以上 B 全国平均 -1ポイント C 85%以上 ※肯定回答	A 84% ○ B 男-4.9 △ B 女-4.8 △ C 92% ○	取組みや児童の意識は達成したが、実績数値は達成に至らなかった。 運動や食育に関する意識は高まった。栄養教諭と連携した野菜の生産者の出前授業、給食委員会が実施した好きな給食アンケートなど給食や食育に係る取組みの成果ともいえる。 一方で、全国体力・運動能力、運動習慣等調査の結果からは全国平均との差が出てしまった。今後は子どもが体を動かすことが楽しめるような取組みを研究していきたい。

目標設定区分2『学校組織の運営』

A 今年度の成果目標	達成基準(各種調査、アンケート等)
教職員一人ひとりが明確なミッションのもと、やりがいと創造力をもって担当に当たれるよう適材適所を意識した学校組織体制を構築とともに、質の高い学校運営をめざす。 ① 「良好な学校組織の在り方」 管理職、教務主任、各部長、ブロック代表者等によるブロック長会議を効率的に開催す	① 学校教育自己診断等 教職員アンケート(3学期分) A 「学校長の示すビジョンが明確ですか」(新規) B 「学校運営の状況や課題を全教職の間で共有し、学校として組織的に取り組んでいるか」(R5/100%) ② 学校教育自己診断等 教職員アンケート(3学期分) A 「学校は楽しく安心できる場所である」(R5/82%) B 「認め合い、支え合い、助け合う温かい職場環境の雰

(様式2)

るとともに、都度学校長のビジョンを明確に示しつつ、円滑な学校運営の推進を図る。 ② 「同僚性」 教職員間で「認め合い、支え合い、助け合い」の意識のもと、組織を超えたサポート体制がとれるよう意識醸成を図り、温かく風通しの良い職場環境をめざす。 ③ 「教職員の資質能力の向上」 支援教育の視点を取り入れた授業づくり、コミュニケーションの構築等、取組みの推進を図る。相手が大人でも子どもでもまずは安心できる言葉かけやフォローに努めながら、必要な指導を行う意識を確立させたい。	困気がありますか」(新規) ③ 学校教育自己診断等 教職員アンケート(3学期分) A(教)「特別支援教育の視点から、指導上の工夫(板書の説明の仕方、教材の工夫など)を行いましたか」(R5/100%) B(児)「先生はあなたの良いところを認めてくれると思いますか」(R5/83%)
---	---

B 目標実現に向けた取組み

項目	達成基準	結果	評価
①「良好な学校組織の在り方」	A 70%以上 B 30%以上 ※最肯定回答	A 72% ○ B 63% ○	達成に至った。 この項目は最肯定回答の数値を基準にしたが、達成できた。とりわけ、「学校運営の状況や課題の共有、組織的な取組み」が基準値より大きく上回っていたことは、大変評価できる。各部会での協議事項が担当者によって適切に進められてきたと思う。より一層組織的な動きに推し進めるには、学校長のさらなるリーダーシップが求められる。
②「同僚性」	A 70%以上 ※肯定回答 B 80%以上 ※最肯定回答	A 96% ○ B 75% △ 肯定94%	概ね達成に至った。 児童と同様に教職員にとっても「職場(学校)は楽しく安心できる場所」でないと高いパフォーマンスは発揮できないと考える。職場の雰囲気に関しては、肯定回答は高かったが、基準としていた最肯定値には及ばなかった。今後もまずは教職員が一丸となり各々の役割を明確にして組織的な動きができるよう努めたい。
③「教職員の資質能力の向上」	A 80%以上 ※最肯定回答 B 90%以上 ※肯定回答	A 69% △ 肯定94% B 87% △	達成に至らなかった。 「先生はあなたの良いところを認めてくれているか」のアンケートについて、肯定回答が87%と高い結果だったが、目標値には至らなかった。さらなる向上を図るために支援教育の視点や考え方は有効であると考え。より一層カウンセリングマインドや支援教育の

(様式2)

			知識を身に着け、子どもに寄り添い、肯定的評価ができる教職員の資質能力を育成したい。
--	--	--	---

目標設定区分3『人の管理・育成』

A 今年度の成果目標		達成基準（各種調査、アンケート等）	
教職員の資質向上とキャリアステージに応じた人材育成に重点を置く。 ① 「教職員の資質能力の向上」 教職員の人権意識の醸成や資質向上を図り、児童や保護者、地域から信頼される組織化された教職員集団をめざす。 ② 「キャリアステージに応じた人材育成」 次期管理職候補、学校教育活動全体の向上を図るミドルリーダーの育成に注力する。 ③ 「持続可能な指導体制の整備」 教職員の働き方改革も踏まえ、各取り組みや会議等がより効果的かつ効率的に進むよう、組織化された会議の運営を模索する。		① 学校教育自己診断等 児童保護者教職員アンケート（3学期分） A（保）「子どもにとって学校は安心できる楽しい場所である」（R5/88％） B（保）「担任等はお子さまの気持ちをよく理解している」（R5/90％） C（児）「学校は楽しく安心できる場所である」（R5/82％） ② 次期管理職候補、首席及び指導教諭等ミドルリーダーに位置する受験者の推薦 ③ 学校教育自己診断等 教職員アンケート（3学期分） A（教）教職員の時間外勤務実態（R5/平均 31H/月※3月） B（教）「授業準備や子どもと向き合える十分な時間が確保できるよう組織として対応できる環境が整っている」（新設）	
B 目標実現に向けた取組み			
項目	達成基準	結果	評価
①「教職員の資質能力の向上」	A 85％以上 B 90％以上 C 85％以上 ※肯定回答	A 91％ ○ B 87％ △ C 89％ ○	概ね達成に至った。 児童も保護者も「学校が安心できる楽しい場所である」について、達成基準を超える結果となったことは評価できる。引き続き「心理的安全性」の大切さを、教職員や保護者に発信したいと思う。 「子どもの気持ちをよく理解している」項目が目標をやや下回った。教職員が子どもに向き合える時間の確保も組織として考える要素であると認識した。
②「キャリアステージに応じた人材育成」	管理職選考及び三部会部長等ミドルリーダーの育成	首席選考推薦 三部会部長に5年め教員等ミドルリーダーを起用	概ね達成に至った。 教職員の平均年齢が下がってきている。ミドルリーダーの育成は急務である。そのなかで、各部会の長を経験年数の少ない教員が担う部や委員会が出ている。円滑な世代交代ができるよう今後も全教職員の意識を高めるとともに、そのなかでミドルリーダーや管

(様式2)

			理職候補者の育成に努めたい。
③「持続可能な指導体制の整備」	A 28H/月以内B 70%以上 ※肯定回答	A 33H/月△ B 84% ○	意識は概ね達成に至ったが実績数値は至らなかった。 加配教員を活用して、会議の精選やパソコンのアプリケーションの活用、標準時数に近づく取組みなど様々な手立てを講じて、教職員の負担軽減につながる取組みを行った。その結果、環境整備の実感については目標を上回ったものの、時間外勤務の実態は目標に至らなかった。引き続き、働き方の意識の変容につながる取組みを進めたい。

目標設定区分4『地域連携と渉外』

A 今年度の成果目標		達成基準（各種調査、アンケート等）	
小中連携・一貫教育を基軸とし、地域コミュニティづくりの推進を図る。 ① 「家庭・地域・学校の連携、協働の推進」 四條畷中学校区学校運営協議会制度（コミュニティ・スクール）の深化と充実を図り、本会が主体となった取組みを展開 PTA活動や地域諸団体と連携した取組みを通して、家庭教育支援の充実に努める。		① 四條畷中学校及び四條畷小学校と連携し、学校運営協議会制度（コミュニティ・スクール）について、学校だよりや各会議において、保護者や地域への発信を行い、学校運営協議会の円滑な運営を図る。 A 学校だよりやHPでの紹介3回以上 ② 学校自己診断等 児童保護者教職員アンケート（3学期分） B（保）（児）（教）「中学校区の取組みやPTA行事、地域行事への参画」に関する質問（新設）	
B 目標実現に向けた取組み			
項目	達成基準	結果	評価
「家庭・地域・学校の連携、協働の推進」	A 学校だよりやHPでの紹介3回以上 B 保 80%以上 児 80%以上 教 90%以上 ※肯定回答	A 3回以上発行（学校だより等） B 保88% ○ B 児74% △ B 教91% ○	概ね達成に至った。 学校だよりや学校と保護者との連絡アプリケーションを活用して、子どもたちの学校での様子やPTAの取組みなど情報発信してきた。 殊に、学校運営協議会については、その仕組みの解説などを行いつつ、「地域でのあいさつ推進」などの取組みを発信した。 また、保護者からは学校と各団体や地域との連携は評価いただいたが、保護者や児童のPTAや地域行事等様々な行事や取組みへの参画等については幾分低下しているように感じる。学校教員の働き方改革が叫ばれるなか、PTAや地域団体等の活性化に関し、学校ができることに限界はあるが、「子どもは地域の“財”

(様式2)

			(たから)」であることを学校からも発信するとともに、地域人材を出前授業にお招きするなど、学校や子どもたちと地域とを繋ぎ、保護者にも興味を持っていただくよう進めていきたい。
--	--	--	---

5 学校関係者による評価(学校運営協議会等)

令和7年3月7日(金)18:30から四條畷中学校会議室にて開催された会議において、四條畷中学校区学校運営協議会委員の皆さんより、いただいたご意見を以下に記載する。

- ・1月31日の公開授業を参観して、学校の仕組みや児童や先生方の様子を感ずることができた。校舎に入って出合った高学年の児童が大きな声で顔を見てあいさつをしてくれたのが印象に残っている。
- ・教職員の横のつながりの大切さを感ずる。自身が小中学校に通学していた頃の学校では考えられないことだが、素晴らしいことであり、時代が変わってきたことを感ずた。
- ・公開授業や参観などでタブレットPCを活用して授業をされている様子をよく見かけた。先生方も工夫されていて、子どもたちもよく使っていた。タブレットPCを使ってどんな授業が展開されているのかもっと知りたい。また、アンケート結果を受けて、なかには「タブレットPCだからわかりにくい」と感ずている児童もいるかもしれないと感ずた。デジタルとアナログの有効な活用が必要ではないか。
- ・各教室にデジタルタイマーがあった。課題終了までの時間などが「見える化」されており、わかりやすい授業が行われている様子がうかがえた。

6 総合評価と次年度に向けて

アンケート等の結果から達成基準に至らなかった項目もあるが、総合的な実績として概ね達成できたと考える。まづもって、子どもたちが安心して登校できていることが数値として高く出たことは、学校としてたいへん嬉しいことである。一方で、全国学調など各種調査テストの結果が達成できていることも、ここ数年、市教委や講師の指導助言のもと、教職員が一丸となって取り組んだ成果であると考えている。結果だけにとらわれることなく、児童への指導や各取組を教職員が同じベクトルで進めていくことに大きな意義があり、そのことが成果につながるものと実感している。子ども理解や子どもたちがいきいきと活動する授業づくりにつなげるために、支援教育の視点、カウンセリングマインドを踏まえた子どもとの関わりなどを研修し、今後も教職員の資質向上に向けた取組を推進していきたい。

加えて、学校からの発信として学校だよりや連絡アプリケーション等のツールに加えて、タイムライン機能を活用して情報発信を行ってきた。アンケートでの把握はできていないが保護者の反応からは概ね良好と受け止めている。児童が安心して学校生活を送るためには、保護者にも学校への信頼と安心感が必要であると考えており、今後も学校で元気に過ごす子どもたちの様子を伝える視点を意識していきたい。

その他アンケート結果からは、教職員や保護者と子どもたちの意識に若干の乖離があることがわかった。教師は取組みや活動を肯定的に捉えていても、その取組みや活動、教師の思いが、子どもたちや保護者に届いていないこともあるように思う。タブレットPC等ICT機器の活用などで顕著に表れている。改善に向けてはタブレットPCの新しい活用方法や好事例を共有し、研鑽を積んでいきたい。そして、児童、保護者、教師の三者の意識が限りなく近づくような取組みにつなげたい。一方で学校運営協議会委員からのご意見のとおり、タブレットPCは万全の代物ではなく学校教育においてはデジタルとアナログの効果的な活用が必要となることから、引き続き有効な活用方法を探りたい。

今年度、数値として達成できなかった項目については、改めて実態を教職員で共有のうえ、各担当や教職員各々が検証を行い、次年度は改善が図られるよう努めたい。